第 86 話　スタジオ夜話

「音へのこだわり」Ⅱ
おかしなお話

☆　はじめに

また先月と同じことを言います。本当に世の中大変なことになっています。４月の７日に発令された緊急事態宣言、一部解除とはなりましたが、東京ではまだ解除されていません。本誌が今月号が発刊される頃にはもしかすると解除されているかもしれません。しかしこの新型コロナウイルスが世の中から無くなったわけではありませんまた第２波、第３波と感染拡大が起きることも想像の範囲内です。結論としてはワクチンの十分な供給と治療薬が完成することによって今のインフルエンザ程度の流行り病となる予想です。しかしインフルエンザでも東邦大学社会疫学教員によると今シーズン全米の感染者は少なくとも 2600 万人また死者は少なくとも１万 4000 人とレポートしています。日本と人口数が違うので難しい判断にはなりますが新型コロナとの重複感染など想像すると恐ろしいものを感じます。この感染拡大の合間になんとか対応策を講じていただきたいと切に願っています。長くなってしまいました。

さて今月のスタジオ夜話前回に引き続き「音へのこだわり」おかしなお話㊁です。筆者に様々な音に関することをご教授してくれた恩師や先輩などの面白おかしいお話を紹介します。お付き合いください。

☆サウンドドラマの制作？その師匠

前回ざくっと恩師のお二人をご紹介しました。ロバート・ラングトン的な人物「並河　亮」師とインディアナ・ジョーンズ的な「呉　正恭」師です。並河師は台本と演出というアプローチからサウンドドラマ（ラジオドラマ）制作を手掛けて多くの作品を世に輩出しています。

一方、呉師はスタジオで早くから様々な実験的作品制作に挑戦していました。マルチチャンネル再生を前提とした作品創りです。筆者がラジオドラマと表現せずサウンドドラマと表現するのは師の影響です。今回はもう一人の先生を筆者が勝手にご紹介いたします。大学の HP などに簡単なプロフィールなどが掲載されているので個人情報の公開にはあたらないと思います。日本大学芸術学部放送学科の「落合賢一」教授です。

■落合　賢一
日本大学芸術学部　放送学科　教授
研究分野：ものづくり技術（機械・電気電子・化学工学）
その他出版物・講演など多数
URL 参照：
https://researchmap.jp/read0028083/works

落合師は筆者が同校に入学した年に卒業、そのまま研究室に勤務したエリートです。主に放送技術関　連の研究をしていました。

師の卒業論文の題材は「デジタル録音」です。業務用のデジタル録音機器は 1970 年代に登場しました昭和 45 年以降の話です。師は 47 年の卒業ですから早くからデジタルに注目していたことになります。記憶では８ビットの量子化が可能な基盤とメモリーで実験をしていたように思います。その後数年して筆者も研究室にお世話になることになります。指導教官は落合師でした。

最初はスタジオ機器の整備のお手伝い、実習授業の準備が筆者の仕事でした。落合師は数々の知識を有し筆者に色々と教えてくださいました。これが今でも大変役にたっています。

測定器の使い方と英語？筆者は英語が苦手です。仕事で海外を訪れるときは四苦八苦です。しかし測定器や製品の操作マニュアルなどはなんとか読めるようになりました。落合師のおかげです。

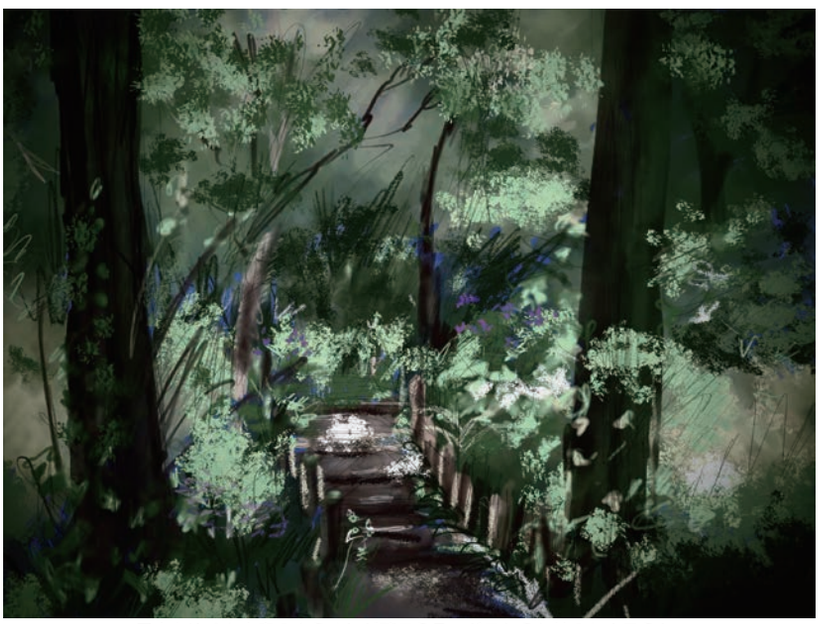
当時大学の研究室では測定器は世界標準、音響機器も世界標準と落合師は予算を獲得していました。国産の測定器や音響機器の性能がまだ発展途上にあったためです。

マニュアルは当然英語となります。厄介な作業です。しかし落合師曰く元々機器の電源スイッチはスイッチという英語だろ想像すれば電源＝パワー、スイッチぐらい英語がわからなくとも理解できる英語はカタカナだと思えと言っていました。確かに、日常使う測定器や音響機器の各部名称や使い方云々は、みなカタカナです。それ以来英語のマニュアルが怖くなくなりました。

またこれは今でも筆者が基本としている師の名言があります。ある日師が筆者に音響機器で最も優秀な機器はどんな機器かわかるか？と話はじめたのです。

その時はテープレコーダの話でした。しかしこの話は全ての機器に共通です。優秀な機器＝良い音、個性的な機器＝好い音ではありません。落合師は「優秀な機器とは良い音とか好い音かという概念ではなく、入力された信号と出力される信号が同じであることが一番重要なのだよ！」と繰り返し言ってました。

つまり筆者の解釈では入力された信号がアンプを通過して出力されたときマッキンの音になっていては、良い音ではなくなっ



里山をゆくと小鳥のさえずりが聴こえる。どこからか蛙のなきごえも。急にやんだ。ふと見ると猫が密かに狙っていた。気配を感じたのだ。紫陽花が咲きだした、もう梅雨はそこまでやってきている。(mo)

ているという解釈です。レコーダーで録音すると音が変わるのでは確かに使い物にはなりません。それとは別にそういう落合師はテープレコーダは STUDER がお好き・・筆者は AMPEX が好きなのですが。問題がありますでしょうか？

☆サウンドドラマの制作？その師匠

次にご紹介するのはやはり技術がご専門の師匠です。純な技術系の先生なのですが演出など制作関係に非常に理解深く何でも相談に乗ってくれる技術者です。

■加藤　卓

1959 年　東海大学工学部電気工学科卒業（在学中から FM 東海立ち上げに従事）

1959 年　FM 東海技術部勤務、FM ステレオ、fAX 実験放送担当

1961 年　東京放送 入社　技術局(ラジオ、テレビ）に勤務サウジアラビア国営放送局立ち上げモスクワサミット、TBS 宇宙プロジェクト数々プロジェクトを担当、成功に導く

2000 年　日本大学芸術学部放送学科講師として勤務

経歴をざくっと見てみるとその凄いことに驚きます。現在の FM 東京の前身 FM 東海の開局メンバーです。ご本人のお話によると 1958 年に免許申請、翌年に放送を開始したそうです。1958 年 12 月 31 日大晦日のことです。日本初の FM 民間放送局の誕生です。東海大学の代々木校舎 5 階が送信所でレコードなどの放送素材を自宅から持ち込みスタッフ総勢 7 ～ 8 人とアナウンサーで始めたそうです。スタジオは一階にあったそうです。

小さいスタジオに 10 人以上の楽団を詰め込んでの放送もしました。もちろんステレオ放送も始めます。レコードプレーヤーに FAIRCHILD 製のステレオカートリッジでステレオレコードに対応していました。また加藤師は TBS 勤務時代に STUDER 社と技術協力をして SMTPE タイムコードを利用した VTR との同期運転を可能としました。

VTR は SONY 社製 BVH1000、マルチレコーダーは 16CH の STUDER A800 コンソールは NEVE 8088 オートメーションなどのシステムは NECAM ループオペレーションを採用して世界でも類を見ないシステムの導入を果たしました。

現在 BS-TBS で放送されている「サウンドイン S」はこのシステムで TV ステレオ音声化され 1978 年分からステレオ放送されています。（1974 年～　当初放送期間）そんな加藤師が筆者と一緒にサラウンドも視野にいれた吹奏楽団 50 人以上の規模の収録にあたって、筆者が相談したサラウンドマイクのセッティングに「普通はとか、常識的にはというのは最初からあるわけではない。恐れづ試して見ることが大切です」また「経験を積めばその試しが初めての試みでも今までの経験値がその手助けをしてくれます。」とアドバイスしてくれました。

名言「初めての試みでも経験値に裏打ちされた発想は非常に有効である。」結果そのセッティングはあまり効果はありませんでしたが、次回の第 2 歩には・・です。

☆次回は

前回に引き続き筆者の恩師を紹介しまた。恩師からアドバイスされた様々なこと、経験が今に生きています。また後輩の現役エンジニアの中にも優れた人もいます。また世の中には優れた人材が多数いることも承知の通りです。そうした人物を紹介しながら話を続けていきます。人物紹介やエピソードが「音へのこだわり」がより理解できるアプローチと信じています。

さてさて困ったウイルス問題、いったいどう対応したら？読者皆様のご健康とご多幸をお祈りいたします。次回もよろしくお願いいたします。

ー 森田　雅行 ー

☆ http://www.uni-w.com/fdi/　ではフルカラーでご覧いただけます。